



学校だより

佐渡市立両津吉井小学校

令和4年12月1日

<12月号>



ホームページ
QRコード

防犯教育の新たな取組

校長 後藤 修治

12月に入り、寒さを感じる季節となってきました。早いもので、2022年も残すところ1カ月となりました。学校では2学期のまとめの時期です。学習や生活においてやり残していることはないか振り返りながら、充実感をもって2学期終業式を迎えられるよう子どもへの指導、支援をしていきたいと思ひます。ご家庭においてもご協力よろしくお願ひいたします。

さて、県教育委員会では、子どもの安全を守るため、今年度、両津中学校区をモデル地域に指定し、文部科学省の委託事業である学校安全総合支援事業を実施しております。この事業は、不審者等の犯罪から、自分で身を守ろうとする防犯意識や危機回避能力（犯罪に会わない力）の向上を目的としています。具体的な取組としては、「地域安全マップづくり」を通して、危険な場所や安全な場所について学び、考えることで危険回避能力を身に付けていきます。本事業の指導者で、犯罪社会学を研究している立正大学の小宮信夫教授は、危険か安全かは「人」ではなく「場所（景色）」で判断する必要があるとしています。そして、景色を見て危険か安全かを考え、判断する力を「景色読解力」としています。

当校では、3年生が社会科の「安全なまちづくり」の学習の発展として、この防犯学習に取り組んでいます。学習の主な流れは、以下のとおりです。

①危険な場所と安全な場所を判断する視点「入りやすさ」「見えやすさ」について知る。

※（誰もが）入りやすくて、（誰からも）見えにくい場所は危険。その逆は安全。

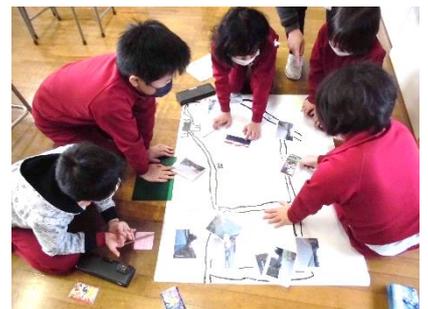
②校区内を実際に歩いて回り（フィールドワーク）、写真を撮りながら危険な場所や安全な場所を探す。

③友達と安全か危険かを再度相談しながら地域安全マップを作成する。

現在、フィールドワークを終え、地域安全マップづくりの最中です。できあがったマップは、2・3年教室または廊下に掲示する予定ですので、学校にお越しの際はご覧ください。

小宮教授は、この防犯教育における「地域安全マップづくり」は、マップの完成が目的ではなく、マップづくりの過程で、危険か安全か考えることが大事であり、それが景色読解力の向上、危険回避能力の向上につながると述べています。

これまでの防犯教育は、不審者等の危険に出くわしたときの対処法が主な内容でした。それに加え、このように未然に危険を回避する力を身に付ける学習も大切であると、本事業を実施し感じました。来年度以降もこのような視点での防犯教育について、継続して実施していきたいと考えています。



（地域安全マップづくりの様子）